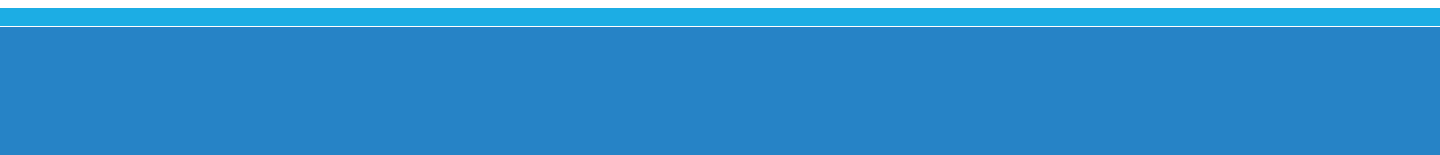


札幌市社会教育委員会議 報告書(令和6年度)

令和7年(2025年)6月

札幌市社会教育委員会議

A solid blue horizontal bar spanning the width of the page at the bottom.

会議経過

- ▶第1回会議（令和6年8月20日）
（協議事項）・今年度の社会教育委員会会議の協議テーマについて・・・1
- ▶視察（令和6年10月10日～11月8日）・・・6
 - ・屯田南小学校：昔遊び体験
 - ・福住小学校：農業体験学習「私も地球号クルー～命について考える～」
 - ・発寒小学校：リアル野球盤
 - ・手稲中央小学校：福祉の学習「みんなにやさしいまち手稲」
- ▶第2回会議（令和6年11月22日）
（報告事項）・第3次札幌市生涯学習推進構想の実施状況について
（協議事項）・協議テーマ「地域学校協働活動を通した地域づくり①」について・・・8
- ▶第3回会議（令和7年1月23日）
（協議事項）・協議テーマ「地域学校協働活動を通した地域づくり②」について・・・9
- ▶第4回会議（令和7年3月14日）
（報告事項）・令和7年度札幌市教育費予算について
 - ・令和6年度野外教育総合推進事業実施報告について
 - ・地域学校協働活動推進事業
令和6年度実施状況及び令和7年度実施方針について
（協議事項）・協議テーマ「地域学校協働活動を通した地域づくり③」について・・・10

今年度の社会教育委員会議の協議テーマについて

令和6年8月20日

テーマ案:「地域学校協働活動を通じた地域づくり」について

課題・背景

急激な社会環境の変化の中で、地域においては支え合いの希薄化・教育力の低下、家庭の孤立化などの課題が指摘され、学校においては、いじめや不登校など子どもを取り巻く問題が複雑化・困難化しており、社会総掛かりで対応することが求められており、地域と学校がパートナーとして連携・協働するための組織的・継続的な仕組みが必要不可欠。

地域と学校が連携・協働して、地域全体で未来を担う子供たちの成長を支え、地域を創生する「地域学校協働活動」を推進すること、その活動を推進する新たな体制として「地域学校協働本部」を全国的に整備すること(提言)

中央教育審議会(H27.12)「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について(答申)」

地域学校協働活動

地域住民、学生、保護者、NPO、民間企業、団体等の幅広い地域住民等の参画を得て、学校を含む地域全体で子どもたちの学びや成長を支える、地域と学校が連携・協働して行う様々な活動。これらの活動を通して地域ぐるみで子どもを育てる環境を醸成する。
例: 休日の体験活動、放課後の学習支援、教育課程内で行う授業補助、キャリア教育、本の読み聞かせなど

「子ども」:多様な学習・体験機会の提供

放課後の学習支援



児童、園児、地域が参加した
プレイパーク活動



地域人材によるキャリア教育

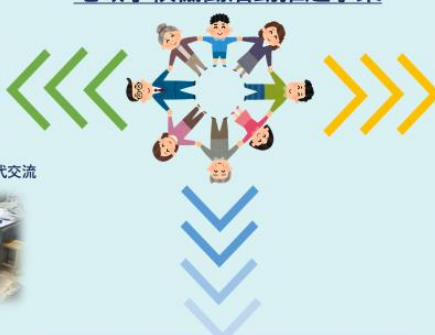


工作体験を通じた多世代交流



学校の中だけでは行えない「本物の経験」を通して、
・子どもの自己肯定感を高める(様々な大人との関わり)
・子どもの価値観を広げる(様々な大人との出会い)
・子どもの可能性、選択を広げる(様々な体験や活動の機会)

地域学校協働活動推進事業



「学校」:働き方改革に資する取組

総合の学習:商店街訪問



地域学校協働活動推進員が、地域について学ぶ授業で訪問する店舗や施設との連絡調整を担うなど、教員の負担軽減に寄与

参観懇談の時間:昔遊び体験



学校として低学年の保護者懇談の際の子どもの預かりに苦慮。保護者から相談を受けるも教員は対応が困難。そのため、地域へ依頼し、保護者懇談の時間に活動を実施。子どもたちは地域に見守られながら活動に参加できたほか、保護者も安心して参観懇談に参加でき、教員の負担なく、学校の抱える課題解決を図れた

「地域」:「学校」を核とした地域づくり

「地域学校協働活動が地域に与える効果として、どのようなことが期待できるか」

- ▶ 昨今、学校の抱える課題が複雑化・多様化していること、地域社会のつながりや支え合いの希薄化等により地域の教育力が衰退していることなど、様々な問題が挙げられている。このような問題に対応していくためには、地域と学校が一体となって、子どもたちの成長を支えていくことが必要であり、文部科学省では、「地域学校協働活動」を全国的に推進しているところである。
- ▶ 札幌市においても、「地域学校協働活動推進事業」の実施により、子どもたちへの本物の経験を通じた多様な体験・学習の機会を提供するとともに、教員の負担軽減につながるような取組を進めているところである。
- ▶ 地域学校協働活動の一層の推進に向けては、地域住民のさらなる理解や参画が必要であるが、学校や子どもたちへの効果と比較して、地域に対する具体的な効果を啓発するにはまだまだ至っていないのが現状である。
- ▶ そこで、今年度の社会教育委員会議では、「地域学校協働活動を通じた地域づくり」についてをテーマとして設定し、事業の更なる推進に向け、地域学校協働活動が地域に与える効果として、どのようなことが期待できるか、議論を進めていくこととした。
- ▶ また、今期の議論の方法として、各委員の専門的な立場から柔軟で多様なご発言をいただくべく、「熟議」を通して進めていくこととした。

➤第1回目の会議では、協議テーマを決定したのち、事務局からの説明などを踏まえ「**地域学校協働活動のもたらす効果や課題**」について、まずは各委員のもつイメージや、これまでの経験などから想像した内容をもとに議論した。

➤主な意見については、次のとおり。

【小田島委員】

- ・地域の中で声を掛け合うことが少なくなっているため、活動を通して大人と子どもがつながる機会となり、子どもと大人が顔見知りになることが増えるのではないかな。
- ・地域の方が集まり、大人同士が知り合う機会ともなるため、孤立のない地域ができるのではないかな。
- ・地域の大人が気軽に学校へ入ることのできる環境ができることは、地域が学校へ理解を深めることにつながる。
- ・学校としても地域にどのような方がいるか知るきっかけとなり、学校の力になっていただける方を見つけることができる。それは、コミュニティ・スクールの準備にもつながる。
- ・子ども目線でいえば、大人に認められる喜びを得られる機会となる。先生や保護者ではない普段とは違う大人に褒められ認められることは、子どもの成長につながる。
- ・こういった活動の機会が増えることは、外部との調整など、その分仕事が増えることにもなり、結局は学校の中で教頭が頑張らなければならないとなると正直大変だ。

【小野寺委員】

- ・地域学校協働活動があることで、地域の様々な大人が気軽に学校へ入ることができ、子どもとのコミュニケーションが生まれる。また子どもにとっても、地域にはいろいろな大人がいるということがわかるきっかけとなる。
- ・子どもを見守る目が増える。学校のことを知っている大人がいて、子どもの安全・安心につながる。
- ・子どもにとって、知っている大人が学校に来ると嬉しいもの。こうした話題は家庭での交流にもつながる。
- ・地域性や活動の日時、内容によって、参加できる人が限られてしまうことは課題。PTAにしても、いつも同じ保護者が参加しているというのが現実としてある。

【高原委員】

- ・親や学校の先生だけではなく、地域の色々な大人と出会い、関わる機会が子どもの学びにつながる。
- ・地域学校協働本部という新たな組織を設置するということは、その運営のための会議など、仕事のための仕事生まれる可能性があり、それは課題に感じる。
- ・PTA活動でも感じることだが、実際にやってみないことには楽しさに気づけないことがある。まずは参加してもらうことが大事。そこで子どもの役に立つという楽しさを感じてもらい、新たな参加者につなげるといった循環が重要。
- ・地域学校協働活動、コミュニティ・スクール、PTA、学校評価委員会などの棲み分けが分かりにくい。
- ・こうして学校と地域の連携をテーマとして取り組むことで、全員が少しずつ良い方向へ意識改革が進むのではないかな。

【松岡委員】

- ・子ども目線で考えると、自分の地域にはたくさんの大人がいることに気がつく。そのことがまず大事。
- ・地域目線では、地域に言わずに学校のことは学校でやってほしいという思いがあるかもしれない課題である。
- ・現状では学校が地域とやり取りするのは管理職が多い。他の先生方と地域のかかわりを生み出していくことが必要。
- ・子どもたちが抱える課題を、プライバシー保護等の観点で、地域とどのように共有し、対応していくか、ケースバイケースでの対応となるだろうが、現実的には難しい。
- ・地域と学校、両者の歩み寄りの方向性や程度、進め方が整理されるのではないか。地域学校協働活動とコミュニティ・スクールはお互いに補うことができる。学校と関わりたい地域住民と、学校も地域に頼りたいという双方向の関係が出てくると良い。

【今泉委員】

- ・制度が示す方向性と現場のニーズのギャップはないか、学校は地域と意欲的に関わろうという姿勢があるか気になるところ。
- ・地域にある支援したい、関わりたいと考えている民間団体、企業やNPOなどの資源を学校にあったニーズで提供できると良い。
- ・教員と地域住民との連携した活動を通すことで、隙間からこぼれない子どもの見守りの目、事前に見守る目、キャッチの目を負担が少なく、効率的に手厚くすることができる。虐待の未然防止の効果を狙うことができる。
- ・学校と地域でつながろうという意識の差があるように感じる。地域学校協働活動を間に挟むことで連携がうまくいき、温度差を縮めるきっかけになるかもしれない。継続的に子どもの育ちを見守ることができれば大きなメリットである。
- ・最近は学校でも働き方改革に意識が向けられるようになった。しかしながら、今ある仕事以外の取組を進めると、先生の時間が取られてしまうという考えでは、連携がうまくいかないのではないか。

【安田委員】

- ・経済的に学校にしか居場所がない、学校にしか行けない子どもたちが地域学校協働活動を通して地域と関わることで、自分たちの居場所を広げることにつながる。
- ・こうした活動に参加したくともできない子どもや家庭もあるだろう。学校の協力は不可欠であり、学校は地域をもっと頼ってほしいと思う。
- ・地域にはたくさんの資源があるのに、学校とうまく結びつかないことがある。地域と学校を結ぶ仲介役が必要。
- ・地域も決して学校に活動を押し付けるということではない。学校と地域がうまく連携することで、困難を抱える子どもたちを見守ることができる。

【臼井委員】

- ・地域住民が学校行事に参加することで、コミュニケーションが生まれ、いろいろな活動につながるのではないかな。
- ・子どもとの関わり合いを通じて、地域のお年寄りの出番が増え、お年寄りが元気になる。
- ・いろいろな地域住民が活動に参加することで、子どもにとっては様々な大人のロールモデルに触れる機会となり、将来こんな大人になりたいというのが見えてくる。
- ・活動を通して地域に足りないものが見えてくるのではないかな。例えば、大人は中々やりたがらない「近所の知らない人に気軽に挨拶する」などの元気さ、親近感子どもたちが自然に持っているもの。一緒に活動することで、自分たち大人や、地域に足りないものが見えてくる。
- ・地域間のつながりが希薄化している。大人自身が地域にどのような人がいるのか見えてくるのは地域としてメリット。地域が学校の活動に関心を向け、地域の人たちが共通の活動することは、大人が自分たちの地域を再発見するきっかけになる。
- ・学校がどんどん開かれればいいのかというと、不審者の問題など安全安心が課題になる。

【片岡副議長】

- ・最近は地域も人の出入りが激しいため、こうした活動で人の見える化が図れることは良い。
- ・学校での学びは社会を学ぶことにつながるが、どうしても頭の中の知識だけになってしまう。地域との学びにつなげることで、学んでいることは生きるために必要な知恵だと分かる。学びを深めるメリットがある。
- ・大学生などは体験することに飢えている。何か言ってみたい、何か見てみたい。何かしてみたいという学生は多い。学生の若い力を活用することで、いろいろな可能性につながる。
- ・学びの場が多様になる。学校の中の学びで満足している子もいれば、現地学習に行っても元気になる子もいる。学校の中で学ぶことも大事だが、自分の学びの幅を広げておくことも大事。地域から学んだことを、年を取ってから思い起こせるくらいの柔軟性をもつことが大事。
- ・学校と地域をつなぐ人材の役割が大きいだろう。一方でその人の能力や経験が学校によって差がつくことが懸念される。

【出口議長】

- ・大人がいろいろ経験してきたことを生かす場となり、子どもたちに伝えることができる。それは大人の存在感や、やりがいにつながっていく。
- ・地域とつながることで、子どもの相談相手が増え、悩んだときに親だけではなくいろいろな人に相談できる可能性がある。実際に先進的に取組を進めている他都市の学校では、不登校が無くなったという実績もある。
- ・子ども自身が自分は一人ではないという思いにつながる可能性がある。
- ・いじめ問題も学校だけでは解決できる問題ではないので、地域と連携して取り組む意識が必要。
- ・地域人材の協力による学習支援の実施によって、よりきめ細やかな教育ができる。多くの学習支援者によって、その子の学力に合った学習支援ができる。
- ・地域の側からすると、いい活動をしようと思っているのになぜやらないのかという考えがあるだろうし、学校側の意見もある。まずは学校のニーズを聞き、こういった活動を支援してもらいたいというところから始めるのが良い。

➤議論を通して地域学校協働活動に対する、多様な意見により、いくつかのキーワードが見えてきた。

➤そこで、「地域学校協働活動のもたらす効果」として特に話題となった事柄を、「地域の大人や子どものかかわり」「学校と地域の連携」「子どもの安全・安心」の大きく3つに分類し、効果・メリットに着目してキーワードを整理することで、今後の議論の参考にすることとした。

■地域の大人や子どものかかわり

- 子どもは大人と触れ合う機会が増えることで、地域には自分たちを気にかけてくれるたくさんの大人がいることに気がつくことができる。
- 子どもたちが様々な大人のロールモデルに触れる機会となる。
- 大人にとって色々な経験を生かす場となり、大人の存在感を高め、大人自身のやりがいにつながる。
- 大人自身、地域の中で声を掛け合うことが少なくなっているため、子どもとのかかわりを通じて、大人同士がつながる機会となる。孤立のない地域づくりができる。
- 地域の様々な大人が気軽に学校に入ることで、子どもとのコミュニケーションが生まれやすくなる。また、地域のお年寄りの出番が増えることで、生きがいづくりにつながる。

■学校と地域の連携

- 学校を支援したい・関わりたいと考える地域の民間団体や企業、NPO等の資源を学校に合ったニーズで提供できる。
- 地域が学校に気軽に入ることでできる環境は、学校への理解を深めるきっかけとなる。
- 活動を通して、地域に足りないことが見えてくる。地域が置かれている状況を再確認できる。
- 学校との連携を通して蓄積した活動の経験は、将来的に行政に頼らない自主的な地域活動を行える糧となる。
- 学校は活動を通して、地域にどのような人がいるか見えてくる。相談先が明確になる。
- 学びの場が多様になる。学校の中で学ぶことも大事だが、地域で学ぶことで学びの幅が広がり、子どもたちが大人になったときにより柔軟な視野をもつことができる。

■子どもの安全・安心

- いじめ等の問題を学校だけで抱えるのではなく、地域と連携して見守る姿勢が大事。
- 不登校などのいろいろな子どもたちがいる中で、学校と地域が連携することで、隙間からこぼれない、子どもを見守る体制づくりを最小限の負担で効率的に実現できる。
- 子どもが地域とつながることで、子どもの相談相手が増え、親や学校だけではなく、相談先の様々な可能性が広がる。(※他都市の学校では不登校が減少した実績も)
- 経済的に学校にしか居場所がない、学校にしか行けない子どもたちが、地域と関わることで、自分たちの居場所を広げることにつながる



地域学校協働活動の取組事例の視察

(令和6年10月10日～11月8日)

▶今後の議論をより具体的なものとするため、実際に地域学校協働活動の取組事例を視察することとした。視察先は、「地域との連携」や「地域学校協働活動推進員の調整事例」等をテーマに事務局が選定。各委員の日程等を踏まえ4校の視察を行った。

▶視察の概要については、次のとおり。

【屯田南小学校：昔遊び体験】

(令和6年10月10日)

・視察者 臼井委員



低学年の保護者懇談の時間を活用し、児童の預かりを兼ねて実施された放課後の「昔遊び体験」。運営は屯田地区子ども会育成連合会やPTAを中心に、卒業生の親や6年生がボランティアとして運営側の一員として参加していた。

会場の体育館には、スライムづくり、ストラックアウト、射的やけん玉遊びなどの複数のブースが設けられ、それぞれのブースで遊びを通した異学年交流や地域交流が図られていた。

同活動は、地域学校協働本部設置以降、毎年継続して実施しているもので、年々運営側の参加者が増えており、活動を通して地域のつながりの広がりがみられた。

【福住小学校：農業体験学習「私も地球号クルー～命について考える～」】

(令和6年10月24日)

・視察者 小田島委員、松岡委員、安田委員、片岡副議長



5年生総合的な学習の時間を活用して、今年5月からスタートした農業体験学習の総まとめの時間。

前半は児童から農業体験を通して感じたことや、学んだことについてのふりかえりと発表があり、後半はゲストティーチャー（JT生命誌研究館名誉館長：中村桂子さん）による児童の発表に対する講評と、特別講演が行われた。

畑（空き地を活用）づくりからはじまった一連の活動は、地域学校協働活動推進員のつながりから発展した様々な団体（一般財団法人HAL財団、JAさっぽろ等）の協力があった行われたものであった。

【発寒小学校：リアル野球盤】

(令和6年10月26日)

・視察者 高原委員



地域学校協働本部とおやじの会の共催で行われた土曜日の運動活動。

リアル野球盤は、ティースタンドの上に置かれたボールをバットで打つといった普段運動をやらない児童も気軽に取り組むことができる簡単なスポーツ。当日は企画を盛り上げるために、プロ野球を模した実況アナウンスやスクリーンを活用した選手紹介など様々な仕掛けが用意された。

本活動は、地域学校協働本部の会長（元PTA会長）が企画し、推進員が調整役となり、おやじの会やPTAに協力を依頼して、今年初めて実現した取組。

児童はもちろんのこと、運営側の大人も楽しく参加することで、持続性のある活動とすることをテーマに行われた。

【手稲中央小学校：福祉の学習「みんなにやさしいまち手稲」】

(令和6年11月8日)

・視察者 小野寺委員、高原委員、今泉委員、榊委員、出口議長



5年生総合的な学習の時間を活用して行われた福祉の学習の集大成として、福祉のまち推進センターによる「福まちサロン」との交流学习を開催。5年生3クラスがそれぞれ自分たちで企画したよさこい、〇×クイズ、じゃんけん列車などを、サロンの参加者とともにに行い交流が図られていた。

同校では、以前から施設訪問等で高齢者との交流が図られていたが、コロナ禍で中断していたため、再開を希望する学校の要望に地域学校協働活動推進員が調整するかたちで実現に至った。

定期開催しているサロンの活動に、推進員がイベント周知や、学校との調整を仲介するかたちで関わり、学校、地域ともに大きな負担なく、活動を発展させる結果となった。

地域学校協働活動を通じた地域づくりについて①

令和6年11月22日

➤第2回会議では、「**地域学校協働活動が地域に及ぼす効果を考える**」をテーマに、前半はそれぞれの視察内容について感想や気づきなどを共有し、後半は、前半で共有した内容や、実際に活動を視察して感じたことなどを踏まえ、地域にとってのメリット・効果は何か議論を行った。

➤議論を通して、各委員の意見より共通した特徴的なキーワードが見えてきた。これらのキーワードを踏まえ、地域に与える効果を次の5つにまとめた。

- ① **熱意を持った大人が、活躍できる場になる**
- ② **子どもをキーワードに大人同士がつながる機会になる**
- ③ **安全で安心できるやさしい地域の形成につながる**
- ④ **子どもたちの地域への愛着の育成につながる**
- ⑤ **チーム推進員を軸とした次世代の地域人材の育成につながる**

➤議論の概要は次のとおり。

1. 地域学校協働活動が「地域」に及ぼす効果を考える



熱識から見えてきた地域に与える効果として期待できること

- ① 熱意を持った大人が、活躍できる場
- ② 子どもをキーワードに大人同士がつながる機会
- ③ 安全で安心できるやさしい地域の形成
- ④ 子どもたちの地域への愛着の育成
- ⑤ チーム推進員を軸とした次世代の地域人材の育成

2. 効果に付随する主な意見

■ ①熱意を持った大人が、活躍できる場

- 大人の熱意が強く、それが子どもたちの刺激になっている
- P T Aを卒業した方など意欲を持つ人のエネルギーを生かせる
- 地域住民にとって色々な経験を生かす場となり、自己実現、生きがいづくりの機会となる
- 社会貢献活動をしたい方にとってのツールになりえる

■ ②子どもをキーワードに大人同士がつながる機会

- 大人自身、地域の中で声掛けの機会が少なくなっている。子どもとの関わりを通じて大人同士がつながり、孤立の無い地域ができる
- お祭り等、地域の活動が縮小している中で、地域のつながり、世代間のつながり、次への活動へのつながりなど、相乗効果が生まれる
- 地域の人だけでなく、関係機関がつながる機会ともなる
- 地域人材と学校の先生がつながる機会ともなる

■ ③安全で安心できるやさしい地域の形成

- 活動を通じて地域の顔が見える関係になり、防犯につながる
- 子どもと地域の高齢者が顔見知りになることで、お互いに見守られる相互の助け合いの関係がつけられる
- 学校と地域の連携が、隙間からこぼれない見守りの体制ができる
- 子どもと地域がつながることで、親や学校だけでなく、子どもにとっての様々な相談先ができる

■ ④子どもたちの地域への愛着の育成

- 子どもたちが地域に関わることで、地域への貢献意識が高まる
- 地域に対する信頼感が、地域の人々に愛されているという意識を育み、それが自分たちが大人になったときに、地域にお返しする気持ちにつながる
- 子どもが様々な大人のロールモデルに出会うことで、地域の色々な大人が自分自身を見守ってくれる気づきが得られる。

■ ⑤チーム推進員を軸とした次世代の地域人材の育成

- 推進員自身が地域の資源であり重要
- 地域の隠れた専門家を発掘するのも推進員の大事な役割
- 推進員が色々な人を巻き込むことで地域の発展が見込める
- 持続可能な取組とするため、推進員は複数にして次世代を育てる

地域学校協働活動を通じた地域づくりについて②

令和7年1月23日

➤第3回会議では、「**地域により一層の効果を及ぼすために、必要なアイデアや工夫を考える**」をテーマに、前回会議を通じてまとめた5つの効果の発現に向け、どのようなことが必要か、その手法について焦点を当てて議論を行った。

➤議論の概要は次のとおり。

いくつかのアイデアや手法は①から⑤の複数の効果に関連している

⑤チーム推進員を軸とした次世代の「地域人材の育成」

- 推進員を中心に地域全体で子どもを守り育てる大切さを皆で共有し、関心を持ってもらう
- PTA活動等で活躍していた方に学校卒業後も情報提供を行い、次世代の推進員へとつなげる
- 各学校の推進員を軸にした取組の相互視察や交流
- 子どもが育つプロセスを充実させ、次世代のリーダーを育てる

④子どもたちの「地域への愛着」の形成

- 学校単位で地域のキャラクターづくり
- 地域の良さを伝える「ふるさと愛」教育
- 地域活動に熱心に取り組む住民と子どもの積極交流
- ミニ児童会館との連携により、幅広く子どもたちを活動に取り込む仕掛けづくり
- 企画から子どもを中心にすることで、地域や学校への愛着、主体的な帰属意識を高める
- 大人のいろいろなロールモデルとの出会いとして、地域住民による「カタリバ」

①熱意を持った「大人が活躍」できる場

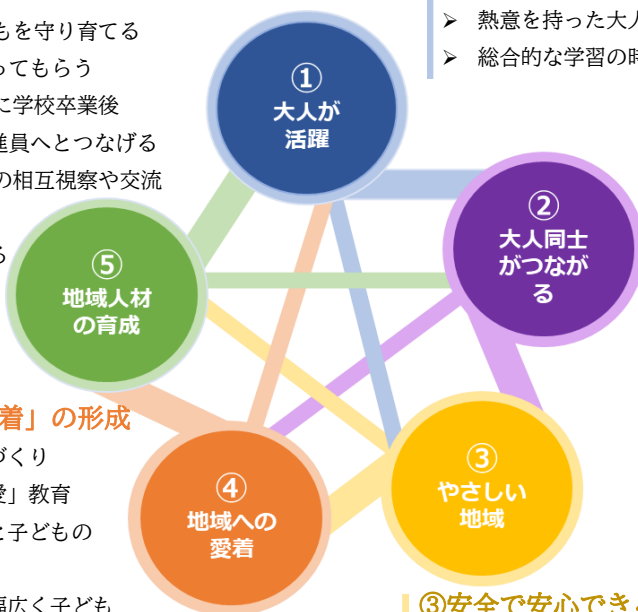
- 興味関心のある人だけが集まる「この指とまれ方式」の活動で負担を少なく強制力の働かないイベントの開催
- 熱意を持った大人（地域人材）のデータベース化
- 総合的な学習の時間における地域人材の積極的な活用

②子どもをキーワードに「大人同士がつながる」機会

- 地学協の講師同士でサークル的に活動を展開し、つながりを広げる
- 地域に根付いたいろいろな組織・団体をつなげる
- 町内会の総会のように大人が集まる場としての活用

③安全で安心できる「やさしい地域」の形成

- 地域の花植え活動で地域を見渡す機会、見守る機会を増やす
- 腕章をつけるなど見守ってくれる人が分かる仕組みづくり
- SNSなど大人が苦手な分野を子どもが講師となって教える
- レスパイト等の制度との柔軟な連携
- 学校を拠点にした避難所体験で地域をつなげ孤立を防ぐ
- 防災士等の地域の有資格者や子ども100当番の家との連携
- 避難訓練を兼ね保護者、地域住民も加えた集団の登下校



➤これまでの議論を通して、地域学校協働活動が地域等により良い効果を及ぼすために、必要なこととして、以下のとおり重要な示唆があった。

★地域に根付いたいろいろな組織・団体をネットワークで結び、横の連携をつくり、一緒に活動を行うことが必要。**大事なことは地域の人や団体を結びつけるネットワーク＝地域学校協働本部の役割。**

★「**もっと学校に大人を**」学校は自分たちだけで問題を抱え込まずに、もっと地域にヘルプを出し、地域も学校側の視点にたって子どもたちのことを考えられると良い。そのためには、**地域学校協働活動等の取組を通じて、学校と地域の相互理解を深めることが重要。**

★まずは何よりも地域学校協働活動を知ってもらうことが必要。**事業の周知・認知度がまだまだ足りない。**成果発表の場（フォーラム等）や地域学校協働活動推進員を活用したPRの機会などが必要。

地域学校協働活動を通じた地域づくりについて③

令和7年3月14日

▶第4回会議では、協議テーマに関する最後の会議の場であったことから、**地域学校協働活動に期待すること**や、これまでの議論を通じた総括的な意見・感想について、各委員から発言があった。各委員からの主な発言は次のとおり。

【小田島委員】

・地域では町内会や行事の担い手の高齢化が課題とされ、学校ではカリキュラムや教職員の働き方改革の観点を踏まえた地域との連携が課題とされている。地域学校協働活動のように、子どもを介して地域と学校の結びつきが強まり、周囲の大人が皆で子どもを育てていくという意識が高まることで、そういった課題の解決や学校と地域の活性化へつながっていくことを願う。

【小野寺委員】

・世代という縦の軸で、赤ちゃんから高齢者までがつながっていくとともに、町内会や子ども会のような組織との連携を進め、横の軸で仲間を増やしていくことができれば良い。
・企業の視点では、市への入札の際に地域活動や学校との連携、子どもたちへのかかわりのような社会貢献の要素が考慮されやすくなれば、より企業のかかわりも増やせるのではないかな。

【高原委員】

・子どもたちの学びや成長を支える活動が地域・学校の連携だけでなく、参加する大人の学びへとつながる点は、PTA活動にも通ずるものがあるため、還元していきたい。
・地域学校協働活動の推進は地域・学校・保護者のよりよい関係構築につながり、安全・安心な地域づくりへつながっていく。地域学校協働本部間の連携等、人々の輪を広げることで持続的な活動体制が構築されることを期待している。

【松岡委員】

・地域とともに学校づくりをしていく時代を迎えるにあたり、少子高齢化という難しさがあるものの「子どもたちのために」という気持ちをもつことが、地域と学校の関係性を深める鍵になる。また、「おらが村の学校」、地域とともにある学校という意識が学校や地域ともに必要。
・学校はただ地域にヘルプを発信するだけでなく、行った活動の成果等をもっとPRしてほしい。地域も自らアンテナを張り、そういった情報を受け止めた方がいい。
・学校では卒業後の生き方を示すことが難しいため、キャリア教育で地域の大人の姿を見せるような、学校に多くの大人が参加し関わっていくような視点が非常に大切。

【今泉委員】

・地域学校協働活動が活発になると、子どもたちにとっての地元感が深まっていく。逆境体験のある子どもたちは、転居等の理由により地元感を得られず孤立しやすい傾向にあるため、地域の様々な居場所での活動や体験といった、保護要件になり得る可能性を秘めたこの活動を一層推進していくことが大切。

【安田委員】

・地域学校協働活動を進めていくことで、地域と学校のより良い関係性の構築へつながっていくことを願う。地域に居場所を見つけられない子どもたちが多くいる中で、この活動を通じてその居場所や頼れる大人を見つけられれば、子どもたちの選択肢は増えていく。子どもたちと地域がつながるきっかけとなるように、学校がハブとなれば良い。

【臼井委員】

- ・子どもたちの時間は学校や塾、部活等の身近なもので占められており、そのままでは長期的な視点や広い視野が欠如してしまう恐れがある。地域学校協働活動を通じ、色々な地域の人々と触れ合うことで、地域社会や大人に対する視座を得られるのではないかな。また、学校・家庭・地域が企業と連携し四角形となり活動することで、子どもたちがより社会人について学ぶことができる上、活動への支援を受けることもできるのではないかな。そういった取組が世代間の格差や分断の解決へつながっていくと良い。
- ・学校は地域の宝であるため、人々が集まり情報を得て、触れ合う場となることは大事である。

【榊委員】

- ・子どもにとって、学校がホッとできる楽しい場であってほしい。また、地域学校協働活動がそのような時間を提供できると良い。そうなるためには、活動の中で子どもたちが地域の信頼できる大人や、素敵だと思える大人と出会うことが大切。
- ・子どもも大人も、心が解けるからこそつながり合えるため、そのための場所、時間となってほしい。

【片岡副議長】

- ・昨今の社会では、普通に学校へ通い仕事をしていくという流れを生きられる子どもたちもいれば、それが叶わない子どもたちもいる。その中で大切なことは、身近な人の安心感や人とつながり続ける力である。地域学校協働活動は、大人とのつながりや横のつながりを作るトレーニングを積み重ねていく場ではないだろうか。そもそも社会教育の行政というものは、成果が出るかが分からず形にも見えにくいものではあるが、その中で種を蒔き続けることが大事であり、活動を続けてよかったと思える人が出てくるよう、取り組む必要がある。

【出口議長】

- ・社会教育をより元気にしていくためには、学んだことを活動へ生かし、見つかった新たな課題の解決のためにまた学ぶ、という「知の循環」が重要。本市の「ちえりあ」や各コミュニティセンターの講座で学んだことを地域学校協働活動へ生かし、生じた課題に対し新たに学ぶ、講座そのものを新たに開く、そのような循環が実現できれば望ましい。
- ・コミュニティ・スクールは本年度から本市で導入開始されたものであり、実際の子どもたちの地域課題や教育目標を皆で共有し、解決のための方策を話し合うもの。そしてその解決策を実現するのが地域学校協働活動である。コミュニティ・スクールの役割を適切に捉え、地域学校協働活動へつなぎ実現していくことが大切であり、そのような構図へ発展させていくことが、指導主事始め市教委に求められる支援である。
- ・子どものときに総合的な学習の時間、探求の時間がしっかり行われる学校で育ったかどうか、成長した時の経験値へとつながっていく。その充実のため、地域の方々と小中高が連携し、それらの時間をより良いものにしていく必要がある。また経験してこなかった大学生たちも、地域学校協働活動のボランティアとして関わることで改善できる部分があるため、大学との連携も実現してほしい。大学に対する情報発信や取り組みやすい環境の整備を進めることで、世代間の取組の一つにもつながっていく。
- ・地域を愛する子どもを育てるためには、多くの大人が関わる必要がある。そうして人々がつながることが持続可能な地域づくりへと発展していくが、コミュニティ・スクールや地域学校協働活動はその上で重要な役割を果たしていくものであろう。

札幌市社会教育委員会 委員名簿

(任期 令和5年7月1日～令和7年6月30日)

	氏 名	区 分	所 属 団 体 等
議 長	出口 寿久	学識経験者	北海道科学大学 全学共通教育部 教授
副議長	片岡 徹	//	北星学園大学 文学部 心理・応用コミュニケーション学科 教授
委 員	小田島 潔恵	学校教育関係者	札幌市中学校長会 (札幌市立藤野中学校 校長)
	小野寺 拓	社会教育関係者	公募委員
	高原 周作	//	札幌市PTA協議会 会長
	松岡 洋一	//	公募委員
	今泉 明子	家庭教育関係者	社会福祉法人 常徳会興正子ども家庭支援センター 副センター長
	安田 香織	//	NPO法人 子どもの未来・にじ色プレイス 代表理事
	臼井 栄三	学識経験者	前 北海道教育大学 岩見沢校 非常勤講師
	榊 ひとみ	//	札幌学院大学 人文学部こども発達学科 准教授

札幌市社会教育委員会議報告書（令和6年度）

令和7年（2025年）6月

編集・発行：札幌市教育委員会生涯学習推進課

市政等資料番号：01-S01-25-1071

〒060-0002 札幌市中央区北2条西2丁目 STV北2条ビル5F

TEL （011）211-3872 FAX （011）211-3873